

# 日本人英語学習者の “source of information”を表す表現の 使用について

藤本 和子

1. アカデミックライティングでは、従来の知見に言及したり、主張や見解の根拠を述べるために、文献などからの引用がなされる。例えば、*Macmillan English Dictionary for Advanced Learners*第2版(2007) (*MED2*) には、“In academic writing and professional reports, you often need to refer to the ideas or findings of others in order to strengthen your argument and support the points you want to make.” (IW25) とあり、アカデミックライティングにおける引用の必要性和理由が述べられている。

本稿では、Biber et al. (1999) と *MED2* のライティング技能向上のためのセクションである *Improving your Writing Skills*<sup>1</sup> の記述とコーパスデータ分析に基づき、“source of information”を表す英語表現である *according to* を中心に、日本人英語学習者コーパスと英語母語話者コーパスを比較することにより、日本人英語学習者のこれらの表現の使用傾向について調査分析することを目的とする。

---

<sup>1</sup> *MED2*では、学習者のライティング技能の向上のために、*Improve your Writing Skills*というセクションが設けられた。*MED2*は、第3版としては改訂されず、現在はオンライン辞典となっている (*MACMILLAN DICTIONARY*. Available at <https://www.macmillandictionary.com/>). *MED2*の *Improve your Writing Skills*は、本稿執筆の2017年10月現在、上記オンライン辞典にも、Macmillanの出版物にも受け継がれていない。

2. 本稿で用いるコーパスは、学習者コーパス the Longman Learners' Corpus (LLC) と母語話者コーパス American English 2006 (AmE06)、British English 2006 (BE06) である。<sup>2</sup> LLCは、世界中から集められた英語学習者のエッセーや試験答案からの英語8,974,424語の書き言葉コーパスである。LLCのNative language categoryには、17言語 (Arabic, Chinese, Czech, French, German, Greek, Hungarian, Italian, Japanese, Korean, Malay, Polish, Portuguese, Slovak, Spanish, Thai, Turkish) とその他の言語としてOtherのカテゴリーが設けられている。本稿で用いる日本人学習者のデータは、第3章は、Country of data collectionを日本、Native language categoryを日本語、Task typeをset/free/project essaysに検索設定した930,973語のサブコーパスを用いる (LLC\_JE)。このサブコーパスには、American English (AmE) とBritish English (BrE) が含まれており、検索設定のTarget variety of Englishを用いて、AmEとBrEのサブコーパスに分けると、AmEは、741,303語、BrEは、189,670語となる (LLC\_JE\_AmE, LLC\_JE\_BrE)。第4章では、日本語を母語とする学習者のすべてのデータ (1,300,772語) を用いる (LLC\_J)。母語話者コーパスは、AmE06は、書き言葉1,175,965語のアメリカ英語コーパスであり、BE06は、書き言葉1,147,097語を集めたイギリス英語コーパスである。両コーパスとも検索設定のBroad genreをLearnedとし、AmE06が185,506語、BE06が182,121語の学術英語のサブコーパス (AmE06\_L、BE06\_L) を用いる。

3. Source of informationを表す表現について、Biber et al. (1999) とMED2の記述に基づき、LLC\_JEとAmE06\_L、BrE06\_Lを比較分析してみよう。

3.1 Biber et al. (1999) は、40,025,700語の話し言葉と書き言葉データを収集した the Longman Spoken and Written English Corpusを分析し、conversation (CONV)、fiction (FICT)、news (NEWS)、academic prose (ACAD) の4つのレジスター (言語使用域) の言語使用を提示している。同書 (557, 855, 860) は、“source of

---

<sup>2</sup> CQPweb at Lancaster. Available at <https://cqpweb.lancs.ac.uk/>.

information”を表す adverbs/adverbials として、*according to*、*apparently*、*as Wardell (1986) notes*、*evidently*、*reportedly*、*reputedly*などを挙げており、これらのうち、最も頻度の高い adverbs/adverbials としては、*according to*のみが掲載されている (561-562, 869-870)。Table 1は、Biber et al. (1999, 869-870)に基づき、*according to*のレジスター別頻度を100万語あたりの調整頻度で表している。出現件数は、50件以下と100件単位で表示されており、CONVは、AmEとBrEのそれぞれの頻度が与えられている。*According to*の頻度は、4つのレジスターの中で、NEWSにおいて最も高く、100万語あたり200件、次いでACADで高く、100万語あたり100件である。CONVでは、AmEとBrEともに50件以下であり、NEWやACADよりも頻度が低い。FICTもCONVと同様に、50件以下である。通例、他者の見解などの紹介や引用は、会話や小説よりも、ニュースレポートや学術論文において、より多く行われるためであろう。

Table 1. *According to*の100万語あたりの出現件数

|                     | AmE CONV     | BrE CONV     | FICT         | NEWS | ACAD |
|---------------------|--------------|--------------|--------------|------|------|
| <i>according to</i> | less than 50 | less than 50 | less than 50 | 200  | 100  |

Biber et al. (1999, 869-870) に基づいて作成。

用例1)-4)は、Biber et al. (1999)とMED2からの引用である。*According to*の後ろに来る名詞は、1)、4)のように特定の人名であったり、2)、3)のように調査などの情報源である。

- 1) *According to Mr K*, it all started with an argument with a customer over a faulty toy in an Easter egg last year. (NEWS) (Biber et al. 1999, 871)
- 2) One person in 10 failed to spell any word correctly *according to the Gallup survey of 1,000 adults*. (NEWS) (Ibid.)
- 3) But drinkers will get off reasonably lightly, *according to reliable Westminster sources*. (NEWS) (Ibid.)

- 4) The purpose of psychoanalytic therapy, *according to Freud*, was to remove the power of the symptom by making it intelligible. (Academic writing) (MED2, IW28)

3.2 日本人英語学習者の*according to*の使用頻度と使用傾向を調査してみよう。コーパス検索をするにあたり、source of informationを表す*according to*の頻度を調査するためには、コーパス用例中の*according to*の意味分類をする必要がある。*Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*第9版(2007) (OALD9)に基づき、*according to*の意味を、1. “as stated or reported by sb/sth” (意味1) と2. “following, agreeing with or depending on sth” (意味2) の2つに分類する。意味1が、source of informationを表す。LLC\_JE\_AmEとAmE06\_L、LLC\_JE\_BrEとBrE06\_Lにおける*according to*の使用頻度をそれぞれ比較し、学習者と母語話者の間で使用頻度に有意差があるか調べるために、log-likelihood testを用いて検定を行った。*According to*の件数は、LLC\_JEは、136件であるが、そのうち2件は意味があいまいであるため除外した。したがって、134件の*according to*のうち、LLC\_JE\_AmEの件数は、117件、LLC\_JE\_BrEの件数は、17件である。AmE06\_Lの件数は、28件であり、BE06\_Lは、件数45件のうち、意味があいまいな2件を除外したため、件数は43件である。Tables 2-3は、*according to*の上記の2つの意味別に、それぞれのコーパスにおける*according to*の実頻度と、カッコ内には1万語あたりの調整頻度を表している。

Table 2. *According to* : LLC\_JE\_AmE vs AmE06\_L

( ) 内は1万語あたりの調整頻度

|  | LLC_JE_AmE<br>(741,303 語) | AmE06_L<br>(185,506 語) | LL    | <i>p</i> -value |
|--|---------------------------|------------------------|-------|-----------------|
| “as stated or reported<br>by sb/sth”                 | 100 (1.35)                | 15 (0.81)              | 3.87  |                 |
| “following, agreeing<br>with or depending on<br>sth” | 17 (0.23)                 | 13 (0.70)              | -8.36 | < 0.01          |

LL=log-likelihood values。LLの-の値は、AmE06\_Lよりも、LLC\_JE\_AmEにおいて、その意味の使用頻度が低いことを表す。

Table 3. *According to* : LLC\_JE\_BrE vs BE06\_L

( ) 内は1万語あたりの調整頻度

|  | LLC_JE_BrE<br>(189,670 語) | BE06_L<br>(182,121 語) | LL     | <i>p</i> -value |
|--|---------------------------|-----------------------|--------|-----------------|
| “as stated or reported<br>by sb/sth”                 | 12 (0.63)                 | 12 (0.66)             | -0.01  |                 |
| “following, agreeing<br>with or depending on<br>sth” | 5 (0.26)                  | 31 (1.70)             | -21.97 | < 0.0001        |

LL=log-likelihood values。LLの-の値は、BE06\_Lよりも、LLC\_JE\_BrEにおいて、その意味の使用頻度が低いことを表す。

まず、source of informationを表す意味1の場合を見てみよう。調整頻度を見ると、LLC\_JE\_AmEとAmE06\_Lでは、LLC\_JE\_AmEのほうが使用頻度が高いが、両者に有意差はない (Table 2)。LLC\_JE\_BrEとBrE06\_Lでは、LLC\_JE\_BrEのほうがBrE06\_Lよりも頻度が低いですが、こちらも両者に有意差は見られない (Table 3)。意味2の場合はどのようであろうか。LLC\_JE\_AmEとLLC\_JE\_BrEは、どちらも、そ

それぞれ比較したAmE06\_LとBrE06\_Lよりも、*according to*を意味2で用いる頻度が有意にかなり低い（それぞれ、 $p<0.01$ 、 $p<0.0001$ ）（Tables 2-3）。意味1と意味2の使用比率は、LLC\_JE\_AmEでは、6：1、LLC\_JE\_BrEでは、2：1に対して、AmE06\_Lでは、1：1、BE06\_Lでは、1：3であり、日本人英語学習者は、*according to*の2つの意味のうち、意味1で用いる場合が多いが、母語話者は、意味1と2がほぼ同じ比率、あるいは意味2のほうで用いることが多い。日本人英語学習者は、意味2よりも意味1のほうになじみがあるのかもしれない。参考までに、*Cambridge Advanced Learner's Dictionary*第4版（2013）（CALD4）の語彙レベル情報によると、意味1は、B1レベル、意味2は、B2レベルであり、後者のほうが高レベルである。

3.3 LLC\_JEの学習者レベル別に、*according to*の意味1での使用傾向を調べてみよう。以下、断りのない限り、*according to*は、意味1で用いられている場合についてである。ここでは、LLC\_JEは、LLC\_JE\_AmEとLLC\_JE\_BrEに分離せず、両方を合わせて検索をする。LLCの設定するレベルのうち、Elementary（139,931語）、Pre-intermediate（169,123語）、Intermediate（125,220語）、Upper intermediate（444,677語）、Advanced（36,355語）の5つのレベルを比較する。3.2の検索で、LLC\_JE\_AmEとLLC\_JE\_BrEにおける“as stated or reported by sb/sth”を意味する*according to*の件数は、112件であるが、そのうち3件は、学習者レベルが不明瞭であるため、109件を学習者レベル別に分類した。Figure 1は、レベル別使用頻度を1万語あたりの調整頻度で表したものである（数値の詳細は、Appendix Aを参照）。上級レベルほど、*according to*の使用頻度が高いことが明らかである。5つのレベルを、下位2レベル（Elementary、Pre-intermediate）と上位3レベル（Intermediate、Upper intermediate、Advanced）の2つのレベルに分けて比較してみると、上位レベルのほうが、*according to*の頻度が有意に高い（ $p<0.0001$ ）。さらに、下位4レベル（Elementary、Pre-intermediate、Intermediate、Upper intermediate）と最上位レベルAdvancedに分けて比較すると、Advancedレベルは、下位4レベルよりも*according to*を有意に多く使用している（ $p<0.001$ ）。レベルの高い学習者のほうが、

下位レベルの学習者よりも *according to* を頻繁に用いていることが分かる。

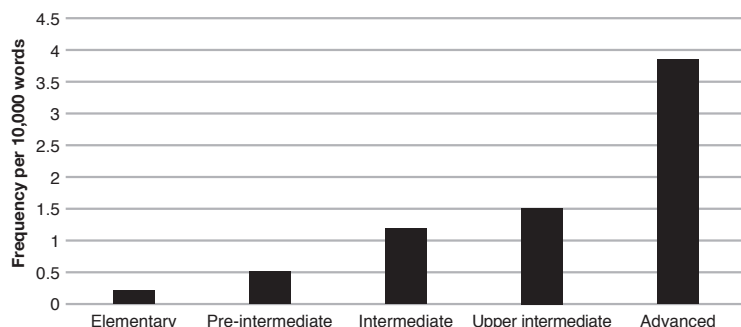


Figure 1. LLC\_JE レベル別頻度 : *according to* (“as stated or reported by sb/sth”)

3.4 ここで、MED2のImproving your Writing Skillsセクション中のsource of informationに関連する記述を見てみよう。MED2が基づくコーパスは、2億2,000万語の話し言葉と書き言葉データで構成されるthe Mcmillan World English Corpus、中国語、日本語、トルコ語、ヨーロッパ言語といった16の異なる母語をもつ学習者のデータからなるおよそ400万語の書き言葉コーパスthe Louvain International Corpus of Learner English (ICLE)、そして英語母語話者のアカデミックライティングから収集された1,500万語の書き言葉コーパスである。<sup>3</sup> MED2 (IW28) では、アカデミックライティングにおいて、“a paraphrase or a summary of a writer’s ideas or findings”を提示する時の表現として、*according to X*とともに*in X’s view*、*in X’s opinion*を挙げている。

Figure 2は、MED2 (IW28) の母語話者のアカデミックライティングにおける*according to X*、*in X’s view*、*in X’s opinion*の頻度を表すグラフに基づいて作成したものである。これら3つの表現の中では、*according to X*の頻度が最も高い。

<sup>3</sup> MED2 (IW2)の情報に基づく。

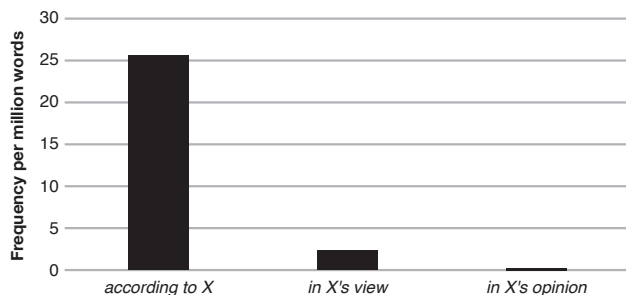


Figure 2. 母語話者アカデミックライティングにおける*according to X*, *in X's view*, *in X's opinion*の頻度

MED2 (IW28) のグラフに基づいて作成。

MED2 (IW28) に掲載されている*in X's view*と*in X's opinion*の用例を引用しておこう。MED2 (IW28) の*according to X*の用例は、3.1の用例4) を参照。

- 5) Our unity with our fellow men, *in Gandhi's view*, presents us with an inescapable moral obligation towards them. (Academic writing) (MED2, IW28)
- 6) The facts of observation might, or might not, fit into an acknowledged scheme of the universe, but the important thing, *in Galileo's opinion*, was to accept the facts and build the theory to fit them. (Academic writing) (Ibid.)

3.5 MED2に掲載されている*in X's view*と*in X's opinion*について、日本人英語学習者のこれらの表現の使用を調査するために、LLC\_JE\_AmEとAmE06\_L、LLC\_JE\_BrEとBrE06\_Lをそれぞれ比較する。*In X's view*, *in X's opinion*の検索方法は、前置詞*in*から右6番目の語に*view/opinion*が来るように検索範囲を設定する。本稿で使用しているコーパスLLC、AmE06、BrE06には、UCREL CLAWS7 Tagsetが用いられており、所有格を表す'sは1語としてカウントされる。Tables 4-5は、検索結果を表す。出現件数がゼロであるセルが多く含まれるため、ここでは検定は行わない。



Table 4. *In X's view*と*in X's opinion*: LLC\_JE\_AmE vs AmE06\_L

( ) 内は1万語あたりの調整頻度

|                       | LLC_JE_AmE<br>(741,303語) | AmE06_L<br>(185,506語) |
|-----------------------|--------------------------|-----------------------|
| <i>in X's view</i>    | 0 (0.00)                 | 3 (0.16)              |
| <i>in X's opinion</i> | 36 (0.49)                | 0 (0.00)              |

Table 5. *In X's view*と*in X's opinion*: LLC\_JE\_BrE vs BE06\_L

( ) 内は1万語あたりの調整頻度

|                       | LLC_JE_BrE<br>(189,670語) | BE06_L<br>(182,121語) |
|-----------------------|--------------------------|----------------------|
| <i>in X's view</i>    | 0 (0.00)                 | 0 (0.00)             |
| <i>in X's opinion</i> | 8 (0.42)                 | 2 (0.11)             |

調整頻度をもとに、各サブコーパスにおける*in X's view*と*in X's opinion*の使用を見てみよう。Table 4を見ると、LLC\_JE\_AmEは、*in X's opinion*、AmE06\_Lは、*in X's view*しか使用しておらず、使用傾向は異なる。Table 5では、LLC\_JE\_BrEとBE06\_Lはともに*in X's opinion*しか使用していないため、傾向は同じである。言及すべきは、*in X's view*と*in X's opinion*のXに用いられている名詞(句)や代名詞を見ると、日本人学習者コーパスLLC\_JE\_AmE、LLC\_JE\_BrEと母語話者コーパスAmE06\_L、BrE06\_Lの間に使用傾向の異なりがあることである。つまり、母語話者コーパスには、一人称代名詞の*my*の使用は見られないが、日本人学習者コーパスには、その使用が見られる。<sup>4</sup> Tables 6-7に、*in my view*と*in my opinion*について、LLC\_JE\_AmEとAmE06\_L、LLC\_JE\_BrEとBrE06\_Lの検索結果を表す。AmE06\_LとBrE06\_Lでは、一人称代名詞の*my*の件数は0件である。つまり、*in*

<sup>4</sup> 一人称代名詞*our*が用いられた*in our view*と*in our opinion*は、4つのサブコーパスのいずれにおいても0件である。

*my view*も*in my opinion*も使用されていない。日本人学習者コーパスLLC\_JE\_AmEとLLC\_JE\_BrEでは、*in my view*は、いずれも0件であるが、*in my opinion*は、LLC\_JE\_AmEでは、33件(1万語あたり0.45件)、LLC\_JE\_BrEでは、8件(1万語あたり0.42件)である。ただし、*in X's view*と*in X's opinion*の1万語あたりの調整頻度が低く、1未満であるため、ここでの分析を結論づけるには、データが不十分であると言えよう。

Table 6. *In my view*と*in my opinion*: LLC\_JE\_AmE vs AmE06\_L

( ) 内は1万語あたりの調整頻度

|                      | LLC_JE_AmE<br>(741,303語) | AmE06_L<br>(185,506語) |
|----------------------|--------------------------|-----------------------|
| <i>in my view</i>    | 0 (0.00)                 | 0 (0.00)              |
| <i>in my opinion</i> | 33 (0.45)                | 0 (0.00)              |

Table 7. *In my view*と*in my opinion*: LLC\_JE\_BrE vs BE06\_L

( ) 内は1万語あたりの調整頻度

|                      | LLC_JE_BrE<br>(189,670語) | BE06_L<br>(182,121語) |
|----------------------|--------------------------|----------------------|
| <i>in my view</i>    | 0 (0.00)                 | 0 (0.00)             |
| <i>in my opinion</i> | 8 (0.42)                 | 0 (0.00)             |

日本人英語学習者が、アカデミックライティングで、*in my opinion*を用いていることに関連して、Aull (2015) のアメリカの大学1年生のアカデミックライティング (evidence-based argumentative essays) から収集した1,910万語コーパス分析に基づく、学生と熟練した書き手との違いについての研究結果は興味深い。Aull (2015, 5) は、学生は、“personal evidence”に関係する“metadiscourse features”を用いる傾向があるとして、学生が用いる“personal evidence markers”の例として、*in my opinion*を挙げている。つまり、大学で求められるアカデミックライティングの指導

をまだ受けていない大学1年生は、熟練者よりも個人的な経験を論の根拠として用いる傾向があり、*in my opinion*などの表現を多用するということである。<sup>5</sup>

ここで、さらに日本人英語学習者の*in my opinion*の使用頻度を学習者のレベル別に見てみよう。LLC\_JE\_AmEとLLC\_JE\_BrEを分離しないで調査した。1万語あたりの調整頻度で表したFigure 3を見て分かるように、Advancedレベルが、最も*in my opinion*を使用している(数値の詳細は、Appendix Bを参照)。下位2レベル(Elementary、Pre-intermediate)と上位3レベル(Intermediate、Upper intermediate、Advanced)に分けて比較すると、上位レベルのほうが、*in my opinion*の頻度が有意に高い( $p<0.0001$ )。LLC\_JEでは、上位レベルでも*in my opinion*の使用傾向がみられ、アカデミックライティングで個人的な意見を論の根拠として用いる傾向があることが分かる。同時に、学習者が意見を述べるという観点からすると、上位レベルのほうが、下位レベルよりも、*in my opinion*を用いて自分の意見をライティングに入れているとも言えよう。

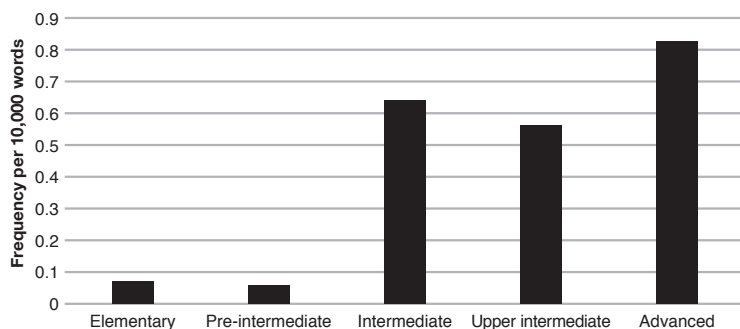


Figure 3. LLC\_JE レベル別頻度 : *in my opinion*

<sup>5</sup> ここでは、詳細について触れることはしないが、Aull (2015, 5) は、学生が、熟練した書き手と異なる点として、“personal evidence”の他に、“strongly stated opinions”と“wide-reaching claims”に関係する“metadiscourse features”も用いる傾向があるとしている。ここでの、“metadiscourse features”とは、同書では、“the features that help writers frame their arguments and lead readers through them” (4) とある。

4. Biber et al. (1999) と MED2 の記述からも、*according to* は、source of information を表す表現の代表的なものである。ここでは、“as stated or reported by sb/sth”を意味する *according to* について、主要な上級学習者用英英辞典や学習英文法書などに掲載されている学習者の誤用について、日本人英語学習者もそのような誤りを犯すかどうか調べてみよう。

まず、以下の5社の上級学習者用辞典、CALD4、Collins COBUILD Advanced Learner's Dictionary 第8版 (2014) (CCALD8)、Longman Dictionary of Contemporary English 第6版 (2014) (LDOCE6)、MACMILLAN DICTIONARY (オンライン版、以下MDO)、MED2、OALD9の*according to*の項目を見ると、CALD4とLDOCE6が、*according to*について、以下のような学習者の犯しやすい誤りと注記を掲載している。

**Warning: according to** is used to introduce what another person said:

*According to Rory, the training course was a waste of time.*

To introduce your own opinion, don't say 'according to me', say **in my opinion** or **I think**:

*According to me, the training course was a waste of time.*

*In my opinion, the training course was a waste of time.* CALD4

Don't say 'according to me' or 'according to my opinion/point of view'. Say **in my opinion**: *In my opinion his first book is much better.* LDOCE6

*According to* は、他者あるいは、他の情報源からの意見や根拠に言及するために用いられるが、学習者は、\**according to me* のように、書き手、話し手自身の意見を述べるのに *according to* を用いる傾向が述べられている。

次に、主要な学習英文法書の記述を見てみよう。

Note that *according to* refers to evidence from someone or somewhere else.

As such, it usually has a third person referent. It cannot be used to refer to one's own views or statements:

***In my opinion** all those sites should be made green-field sites.*

(~~According to me/according to my opinion, all these sites should be ...~~)

Cater and McCarthy (2006, 25)

We only use *according to* when we refer to an opinion from someone else or somewhere else. When we talk about our opinion, we use phrases such as 'in my opinion' or 'in our view' :

***In my opinion**, they were not very polite.*

Not: ~~According to me~~ ...

Carter et al. (2011, 16)

If you want to emphasize that what you are saying is your own opinion, you say '**In my opinion** ...' or '**In our opinion** ...'

*In my opinion* we face a national emergency.

*The temple gets crowded, and in our opinion it's best to visit it in the evening.*

Don't say '~~according to me~~' or '~~according to us~~' .

Don't use **according to** and **opinion** together. Don't say, for example, '~~According to the bishop's opinion, the public has a right to know~~'. You say '**The bishop's opinion is that** the public has a right to know' .

The psychiatrist's opinion was that John was suffering from depression.

Hands and Wild (2012, 7)

We do not usually give our opinions with *according to*. Compare:

***According to Anna**, her boyfriend is brilliant.* (= If what Anna says is true, ...)

***In my opinion**, Anna's boyfriend is an idiot.* (NOT ~~According to me~~, ...)

Swan (2016, エントリー 356)

学習者の誤用例として、Cater and McCarthy (2006, 25) は、\**according to me*、\**according to my opinion*を、Carter et al. (2011, 16) と Swan (2016, エントリー 356) は、\**according to me*を、Hands and Wild (2012, 7) は、\**according to me*、\**according to us*をそれぞれ掲載している。Hands and Wild (2012, 7) は、上記の学習者の誤用の他に、第三者の意見に言及する場合に、*according to*と*opinion*を一緒に用いる、\**according to the bishop's opinion*のような誤用例も掲載している。

上級学習者用英英辞典や学習英文法書が掲載する学習者の誤用を日本人英語学習者も犯しているだろうか。上記の誤用のうち、自分自身の意見などを述べる場合に、*according to*を用いてしまう\**according to me*と\**according to my opinion*の2つの誤用について、LLCを用いて調査してみよう。ここでは、LLCに、学習者のNative language categoryやTask typeなどの検索制限をかけず、LLCのデータすべてを検索対象とする。検索の結果、\**according to me*は、25件（100万語あたり2.79件）であり、\**according to my opinion*は、13件（100万語あたり1.45件）である。これら38件の中に、日本人学習者による誤りはない。次に、LLCのTextに付された学習者情報をもとに、これらの誤用表現を用いた学習者の母語を調査する。Table 8は、調査結果を表したものである。\**According to me*の使用は、イタリア語母語話者が最も多く、9件（36%）、フランス語母語話者6件（24%）、ドイツ語母語話者4件（16%）が後に続く。これらイタリア語派、ゲルマン語派の言語の母語話者で80%近くを占めている。\**According to my opinion*は、ギリシア語母語話者の使用が、件数の半数以上を占めており、7件（54%）である。これらのことから、LLCを用いての分析結果では、上級学習者用英英辞典や学習英文法書に掲載されている学習者の誤りは、日本人英語学習者にはあてはまらないと言える。

Table 8. LLC: *\*according to me* と *\*according to my opinion* 母語別使用頻度

| <i>*according to me</i> |    | <i>*according to my opinion</i> |    |
|-------------------------|----|---------------------------------|----|
| Arabic                  | 1  | German                          | 1  |
| French                  | 6  | Greek                           | 7  |
| German                  | 4  | Italian                         | 2  |
| Italian                 | 9  | Portuguese                      | 1  |
| Polish                  | 2  | Slovak                          | 1  |
| Portuguese              | 2  | Other                           | 1  |
| Turkish                 | 1  | Total                           | 13 |
| Total                   | 25 |                                 |    |

ここで述べておくべきことは、上記の上級学習者用英英辞典や学習英文法書が、すべて、学習者の誤用*\*according to me*に代わる表現例として、*in my opinion*を提示していることである。学習辞典や学習英文法書のこの表現の提示は、英語学習者の*in my opinion*の使用頻度を高くする一因となりうるのではないだろうか。

5. LLC\_JEとAmE06\_L、BrE06\_Lの比較結果、*according to*は、“as stated or reported by sb/sth”を意味する場合には、日本人英語学習者と母語話者の使用頻度に有意差はなかった。しかしながら、母語話者コーパスでは0件である*in my opinion*を日本人学習者が用いていることから、日本人学習者が、自分自身の意見に基づいて、論を展開することが考えられる。主要な学習者用英英辞典や学習英文法書が、学習者の誤用表現である*\*according to me*を挙げ、正しい表現として*in my opinion*を掲載しているが、このことは、学習者の*in my opinion*の使用に影響を与えないのではないだろうか。つまり、一般に、辞典や文法書が掲げる代表的な表現が、学習者にとって、なじみのあるものとなり、それらの表現を多用することにもつながると考えられるからだ。

今後、さらに、source of informationを表す英語表現の調査範囲を広げ、学習者

の使用傾向を調査する必要がある。ライティングのタイプや、学問分野による引用の頻度や引用方法の異なりと source of information を表す表現の使用頻度の調査も必要であろう。

Appendix A. LLC\_JE レベル別頻度 : *according to* (“as stated or reported by sb/sth”)  
( ) 内は1万語あたりの調整頻度

| Elementary<br>(139,931 語) | Pre-intermediate<br>(169,123 語) | Intermediate<br>(125,220 語) | Upper<br>intermediate<br>(444,677 語) | Advanced<br>(36,355 語) |
|---------------------------|---------------------------------|-----------------------------|--------------------------------------|------------------------|
| 3 (0.21)                  | 9 (0.53)                        | 15 (1.20)                   | 68 (1.53)                            | 14 (3.85)              |

Appendix B. LLC\_JE レベル別頻度 : *in my opinion*  
( ) 内は1万語あたりの調整頻度

| Elementary<br>(139,931 語) | Pre-intermediate<br>(169,123 語) | Intermediate<br>(125,220 語) | Upper<br>intermediate<br>(444,677 語) | Advanced<br>(36,355 語) |
|---------------------------|---------------------------------|-----------------------------|--------------------------------------|------------------------|
| 1 (0.07)                  | 1 (0.06)                        | 8 (0.64)                    | 25 (0.56)                            | 3 (0.83)               |

### Acknowledgements

この論文は、科学研究費補助金の助成を受けて行った研究成果の一部である (JSPS KAKENHI Grant Number JP16K02856)。

### References

- Aull, Laura. 2015. *First-Year University Writing*. New York: Palgrave Macmillan.
- Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad, and Edward Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. Harlow: Pearson Education Limited.
- Carter, Ronald, and Michael McCarthy. 2006. *Cambridge Grammar of English*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Carter, Ronald, Michael McCarthy, Geraldine Mark, and Anne O’Keeffe. 2011. *English Grammar Today*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 藤本和子. 2017. 「日本人英語学習者のモダリティ表現の使用について— “certainty” と “doubt” を表す副詞—」創価大学英文学会. 『英語英文学研究』第42巻第1号. pp. 93-106.
- Hands, Penny, and Kate Wild, eds. 2012. *Collins COBUILD English Usage*. 3rd ed. Glasgow:



HarperCollins Publishers.

Hyland, Ken. 2005. *Metadiscourse*. London: Continuum.

Swan, Michael. 2016. *Practical English Usage*. 4th ed. Oxford: Oxford University Press.

Wette, Rosemary. 2017. "Source Text Use by Undergraduate Post-novice L2 Writers in Disciplinary Assignments: Progress and Ongoing Challenges." *Journal of Second Language Writing*. 37: 46-58.

*Cambridge Advanced Learner's Dictionary*. 4th ed. 2013. Cambridge: Cambridge University Press. (CALD4)

*Collins COBUILD Advanced Learner's Dictionary*. 8th ed. 2014. Glasgow: HarperCollins Publishers. (CCALD8)

*Longman Dictionary of Contemporary English*. 6th ed. 2014. Harlow: Pearson Education Limited. (LDOCE6)

*Macmillan English Dictionary for Advanced Learners*. 2nd ed. 2007. Oxford: Macmillan Education. (MED2)

*Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*. 9th ed. 2015. Oxford: Oxford University Press. (OALD9)

*Oxford Learner's Dictionary of Academic English*. 2014. Oxford: Oxford University Press. (OLDAE)

MACMILLAN DICTIONARY. © Macmillan Publishers Limited 2009-2017. Available at <https://www.macmillandictionary.com/> (accessed October 29, 2017) . (MDO)